

『松原遺跡弥生編』整理中間報告

青木 一男

I はじめに	III 遺構の整理作業から
II 土器の整理作業から	1 建物遺構
1 様相	2 栗林様式期の集落
2 時期	IV おわりに

I はじめに

長野市松代町に所在する松原遺跡は、上信越自動車道の建設に伴い1989年から3年間発掘調査が実施され、縄文時代から中世に至る複合遺跡であることが明らかとなった。そのうち、弥生時代中期後半の栗林文化期において、当遺跡は長野盆地でも中核的なムラとして注目されている。報告書「弥生編」刊行に向けての本格的な整理作業は、1995年から実施され、現在、土器、遺構の整理作業が継続中である。今回は整理作業の過程の中から抽出された当該期土器群の様相と建物遺構について中間報告という形で提示したい。

II 土器の整理作業から

1 様相

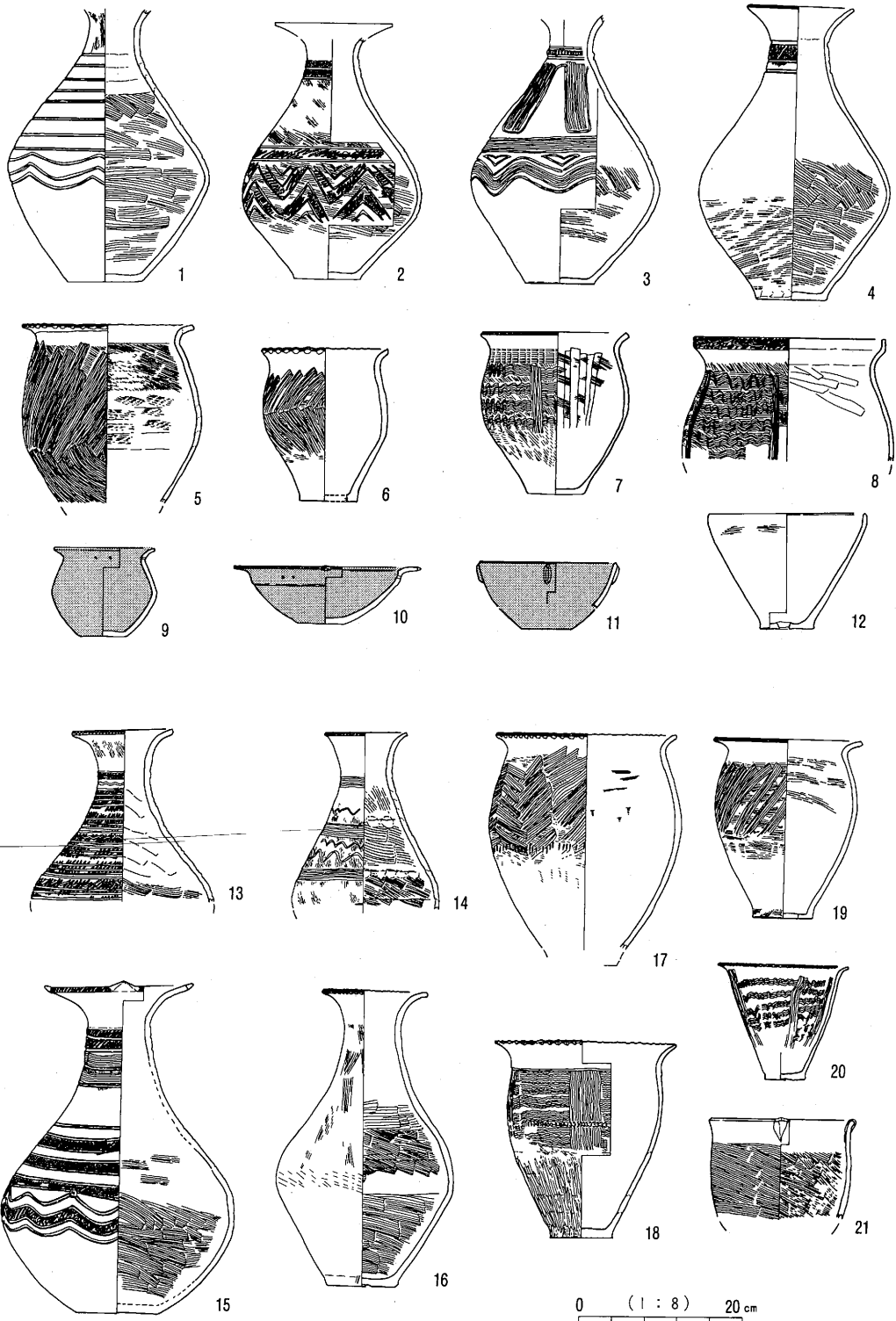
松原遺跡の弥生中期後半から後期に至る土器は、コンテナ数にしておよそ4000箱を数える。現在、様相の確認、接合、実測作業を進めている。作業途中ではあるが5つの様相を示してみたい。

[様相1] (第1図) SK156 (1~12), SB260 (13~21) (註1)

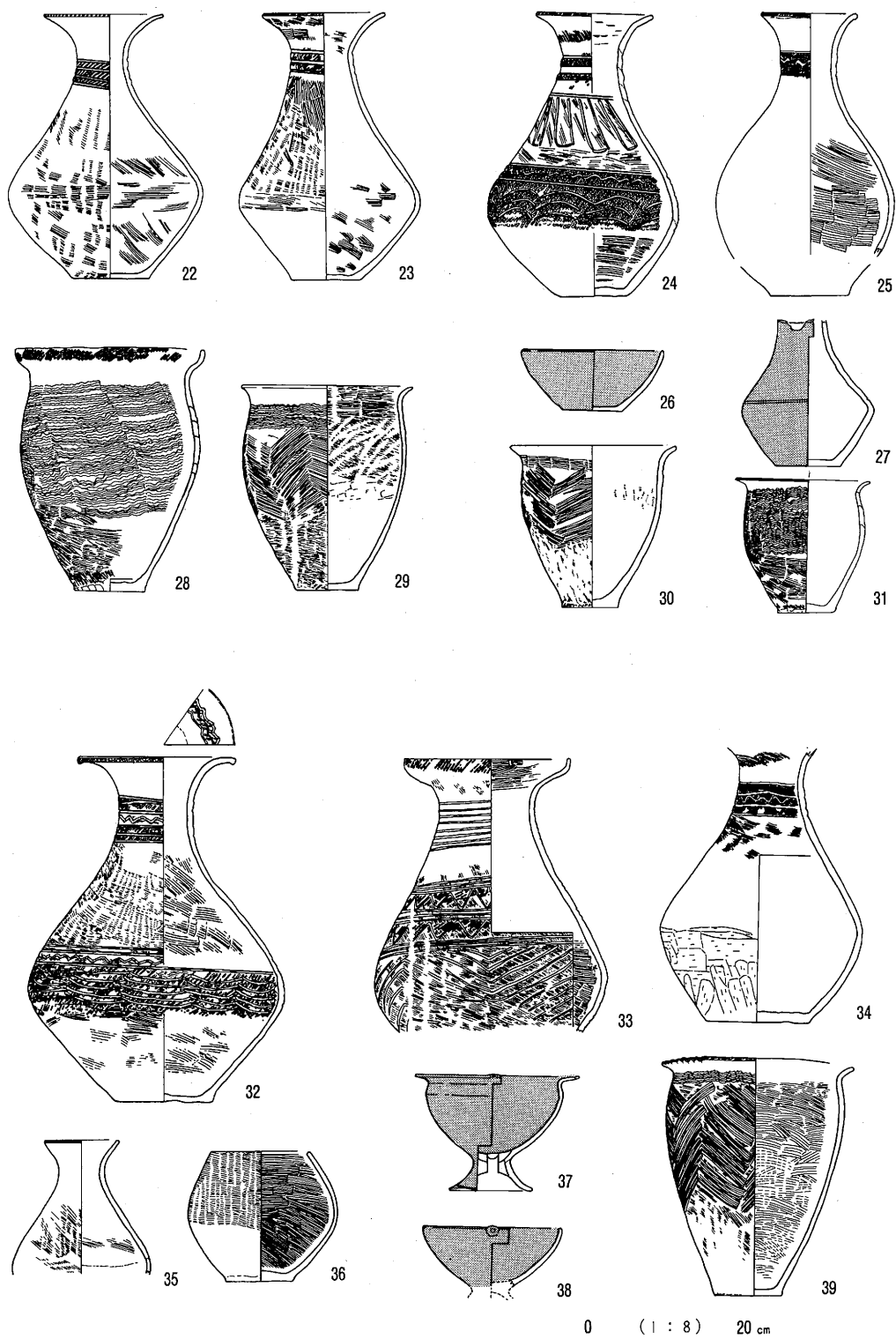
器種構成は、壺・甕・鉢・高杯よりなる。壺は細頸傾向(1~3)で、口縁部は短く外反し狭口になるもの(13~14)と口縁部の外反度が大きく広口傾向のもの(15)がある。体部の加飾志向は一概に高いとは言えないが、縄文、沈線文、櫛描文で縦位あるいは横位に文様施文を行う(1~3, 13~15)。甕は深鉢型(20)と卵型(19)のものがある。文様構成は櫛描羽状文、波状文を主体とする。胴部に横羽状文(5, 6), 刺突列点文(17, 18), 口縁部に指オサエあるいは押し引きによる波状口縁が一定量みられる。

[様相2] (第2図) SB1102 (22~31), SK1333 (32~39)

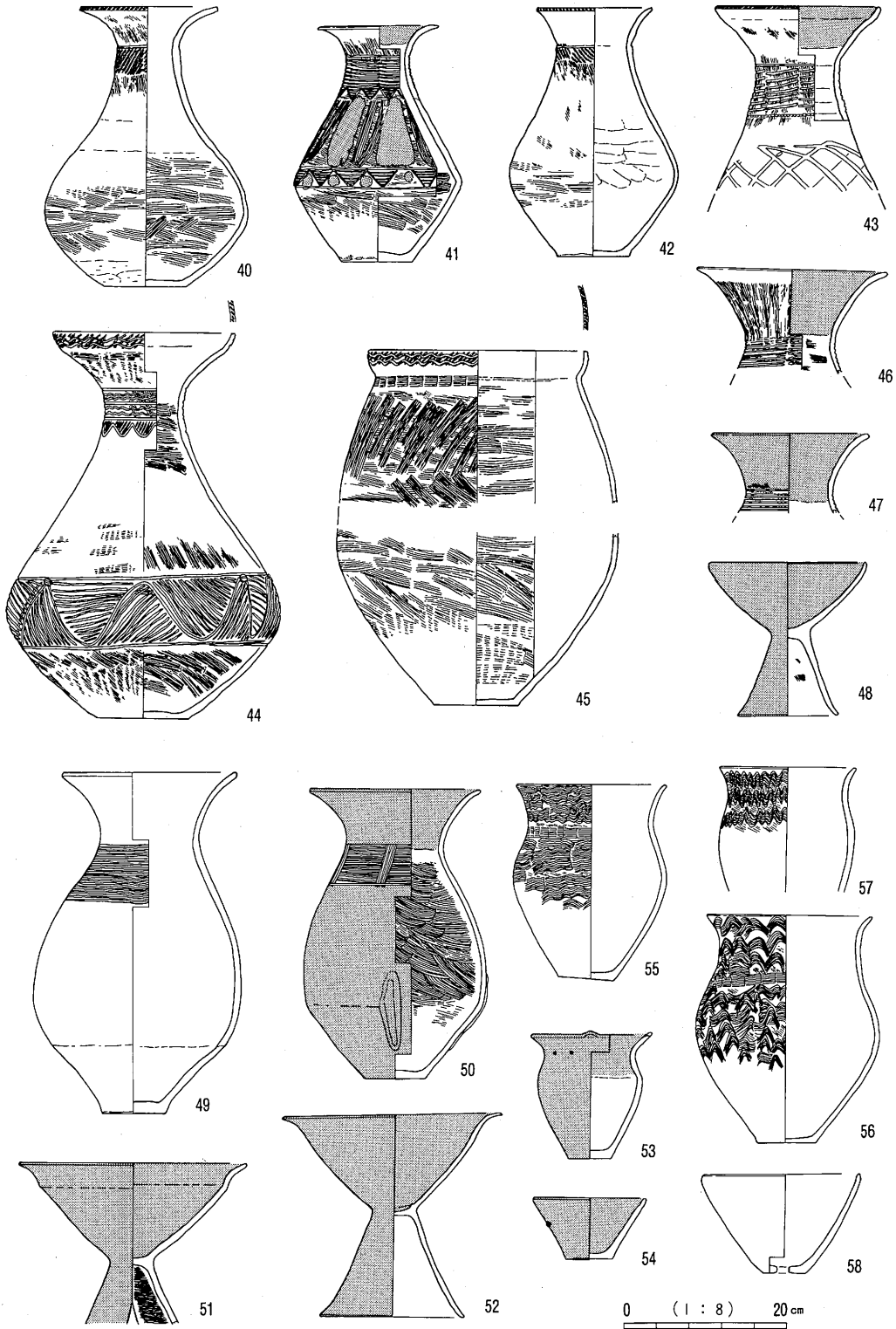
器種構成は壺・甕・鉢・高杯よりなる。台付甕・高杯が様相1に比べて増加傾向にある。壺は細頸傾向のもの(22, 25)と太頸傾向のもの(23, 24, 32)があり、口縁部が大きく外反することによって広口となる(22~24, 32)。様相1にみられた、細首で狭口となるタイプ(25)は量的に減少する。太頸壺(33)もみられる。体部の加飾は、沈線文、櫛描文の施文が



第1図 様相Iの土器群
1～12 : SK156 13～21 : SB260



第2図 様相2の土器群
22~31 : SB1102 32~39 : SK1333



第3図 様相3～5の土器群

40～45 : SK19I 46～48 : SB228 49～58 : SD10I

減少し、ヘラミガキによるものが増加する。全面赤色塗彩を施した小型壺（27）がみられる。

甕は、頸部文様帯に波状文をもつもの（29, 39）、直線文をもつもの、簾状文をもつもの（30）があり、体部に縦羽状文を施文する率が高い。横羽状文、胴部刺突列点文が減少する。高杯は鉢に低脚の台が付いた形となり、口縁端部の形態から齔状口縁（37）と椀型口縁（38）がみられる。

〔様相 3〕（第 3 図） SK191（40～45）

器種構成は壺・甕・鉢・高杯よりなる。壺は細頸傾向のもの（40）と太頸傾向のもの（41～43）があるが、後者が一定量を占めるようになる。体部への加飾は、胴最大径付近に文様を構成するもの（41, 44）は残存するが、胴全体にわたる多段横帯文は姿を消す。頸部にみられる太いヒゴを束ねた擬簾状文（41, 43）あるいは沈線による鋸歯文（41, 44）は様相 4 につながる要素である。口縁部内外面の一部に赤色塗彩を行うものが出現する。甕は卵形のものがみられ、横羽状文もみられる（45）。

〔様相 4〕（第 3 図） SB228（46～48）

器種構成は壺・甕・鉢・高杯よりなる。壺は太頸壺（46, 47）で口縁部が大きく外反し広口傾向となる。様相 4 において細頸壺は姿を消しているものと考ええる。頸部文様帯は様相 3, 41, 43 と同様な擬簾状文を施すがヒゴが細くなり、櫛描簾状文に近い様相を示す。口縁部内面のみを赤彩するもの（46）と内外面を赤彩するもの（47）がある。高杯は椀型高杯（48）がみられるが様相 2, 37 の高杯と比べると脚部がのびている。

〔様相 5〕（第 3 図） SD101（49～58）

器種構成は、壺・甕・鉢・高杯よりなる。壺は太頸壺（49, 50）で、口縁部が大きく外反する。装飾は頸部に櫛描直線文および T 字文を施し、口縁部内外面および体部に赤色塗彩を行うもの（50）とヘラミガキをていねいに施し赤色塗彩を行わないもの（49）がみられる。胴部最大径付近に付着させる隆帯（50）は、様相 2～3 に多くみられる。高杯は齔状口縁のもの（52）と有段口縁のもの（51）があり、比率的には前者の方が多い。甕は口縁部が弓状に大きく外反する。文様施文は櫛歯状原体を一定間隔毎に器面からはなして施文するもの（55, 56）と器面からはなさずに一回転してしまうもの（57）がある。後者は波状文の施文が 3～4 段と少なく胴部最大径まで文様が及ばない。

2 時期

様相 1～3 は弥生時代中期後半栗林式様式を、様相 4～5 は弥生時代後期箱清水様式を示す。様相 1～5 は古い様相から新しい様相への変化を想定したものであるが、様相 3 と様相 4 の間には 1 様相あるものと考えている。

松原遺跡は高速道調査部分に隣接して長野市埋蔵文化財センターが調査を行い、報告書 3 冊刊行されている。寺島孝典氏は、「松原遺跡Ⅲ」で弥生時代中期後半の土器を松原Ⅰ期から松原Ⅲ期に編年する。本稿で言う様相 1～様相 3 も寺島編年と矛盾しない。寺島氏によれば市調査分の松原遺跡において住居の 8 割が松原Ⅱ期にあたるという。県センター分の竪穴住居出土

土器も様相2が主体となる様子がうかがえる。

III 遺構の整理作業から

1 建物遺構

松原遺跡の建物遺構には、竪穴住居址、平地式建物址、掘立柱建物址の3形態が存在する(第4図)。平地式建物址は、幅40～60cmほどの溝が円形、あるいは楕円形に平面を区画し、内部に建物構造を有する。溝で囲まれた範囲の長軸は7～12mを計る。平地式建物址は不明瞭な点が多いが、竪穴住居址同様その中央部に地床炉が存在する。主柱穴は竪穴住居址のような大形の掘り方はなく、小型のピットが散在する。竪穴住居址のような対称構造ではなく求心構造をもつのではないかと考えている。平地式建物址は建て替えおよび移動によって複雑な切り合いをなす。掘立柱建物址は発掘調査時点で明確な認識がなく、図面上で復元したものが大半となる。1間×2間から1間×7間まであり、長屋様建物の様相をなす。ピットは掘り方が浅く、径も小さいことから、倉的機能よりも住居機能を考えたい。

松原遺跡県埋文センター調査地点の建物遺構は、竪穴住居址246軒以上、平地式建物址100棟以上、掘立柱建物址100棟以上となる。平地式建物址、掘立柱建物址に伴う土器の判定が難しいため、時期の設定に難行しているが、3つの建物遺構は共存していたものと想定する。

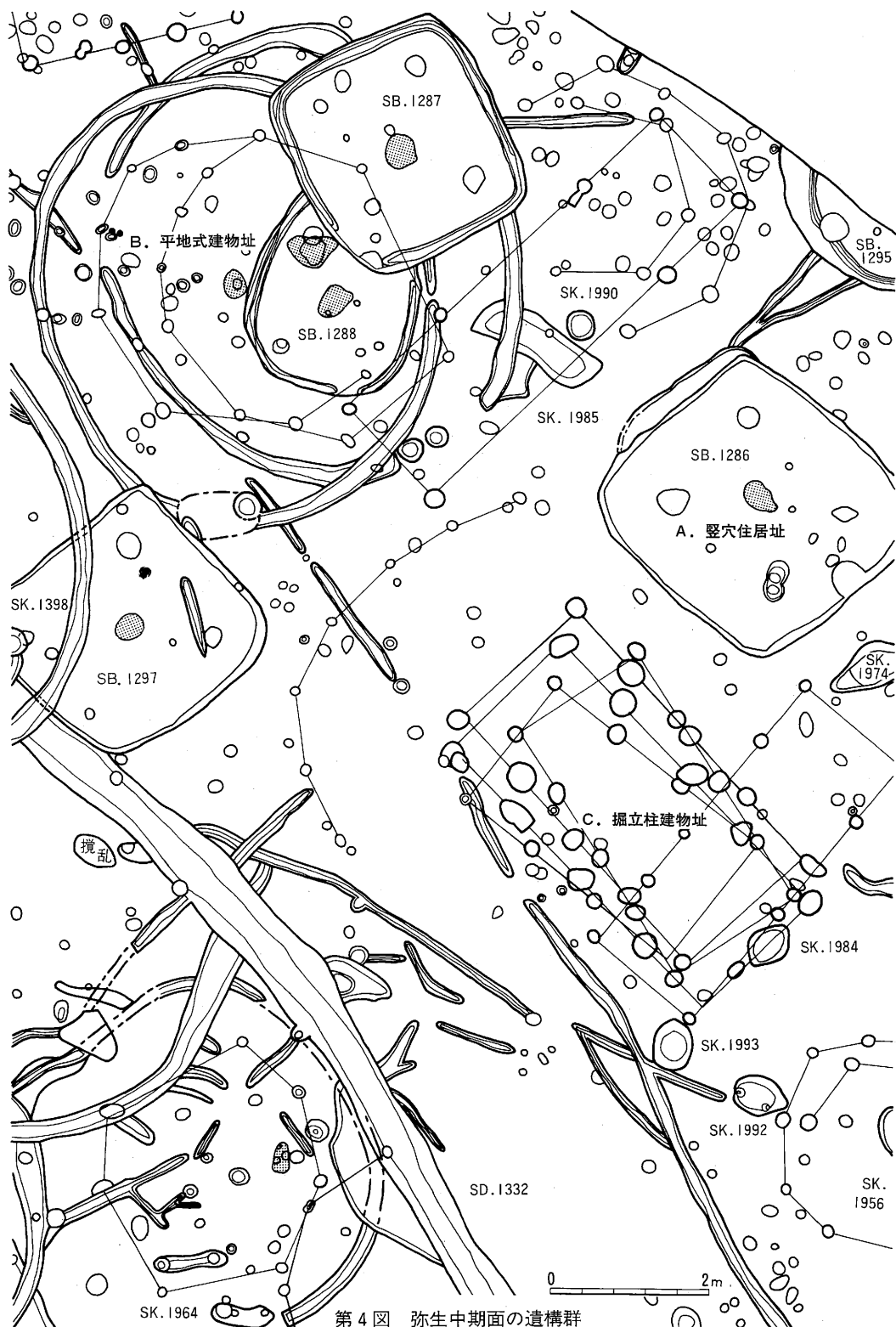
2 栗林様式期の集落

弥生時代中期後半の栗林式様式は、千曲川流域および松本・諏訪盆地に分布する。集落内における建物の構成は小地域単位によって異なる。松本市県町遺跡、宮淵遺跡、岡谷市海戸遺跡、佐久市北西の久保遺跡では竪穴住居址のみで構成される。県北部の飯山市上野遺跡、小泉遺跡では竪穴住居址と掘立柱建物址で構成される。小泉遺跡においては、地形の単位毎に両者の比率が異なっている。一方、中野市栗林遺跡ではA区とD区での構成が異なり、A区が竪穴住居址のみで構成されるのに対し、D区では掘立柱建物址のみによって構成される。A区が古相、D区が新相を示す。

現状では、栗林様式の集落における居住想定が可能な建物の構成は長野県北部では竪穴住居址と掘立柱建物址の混在化が確認でき、南部の松本、諏訪、佐久盆地では竪穴住居址のみの構成となる。一方、周囲に溝を備えた平地式建物址は長野県では松原遺跡、榎田遺跡例が唯一であるが、石川県から新潟県では弥生時代中期から古墳時代の住居構造として普遍的にみられる。柏崎市下谷地遺跡では平地式建物址と掘立柱建物址の構成をとるが、この構成は北陸地方の弥生時代中期後半の建物構成としてかなり普遍性をもつらしい(註2)。松原遺跡、榎田遺跡にみられる平地式建物址、掘立柱建物址の系譜について考えなければならない。

IV おわりに

上信越自動車道は更科の本拠地である塩崎、篠ノ井を抜け、千曲川を渡り河東山系眼下、埴科から高井に展開する自然堤防上の遺跡を串指しにした。(財)長野県埋蔵文化財センターは河東



第4図 弥生中期面の遺構群

地域の栗林期の遺跡として、更埴市大穴、屋代、長野市松原、川田、春山B、榎田遺跡を調査した。私どもは個々の遺跡の整理作業はもちろんのこと、河東地域に展開する遺跡間ネットワーク、ひいては栗林様式圏を視野に整理作業を行わねばなるまい。次年度からは石製品整理作業が開始される。河東地域のネットワークにおける松原遺跡の位置がさらに明確となることだろう。

註1 SKは土壙を SBは竪穴住居址を示す

註2 田嶋明人 1991年 「北陸の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会